

知的障害特別支援学校における教育課程の検討 — 領域・教科を合わせた指導を中心に —

熊田 正俊¹⁾・別府 悦子²⁾・野村 香代³⁾・鎌手 晋¹⁾
井上 京子¹⁾・野田 幸世¹⁾
長谷川明美¹⁾・早川 和代¹⁾・宮本 正一²⁾

The Study on Curriculum of Composite Learning in Special Support Schools with Mental Disabled Children

Masatoshi KUMADA, Etsuko BEPPU, Kayo NOMURA, Susumu KAMATE,
Kyouko INOUE, Satiyo NODA,
Akemi HASEGAWA, Kazuyo HAYAKAWA, and Masakazu MIYAMOTO

知的障害のある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校においては、「領域・教科を合わせた指導」と言われる各教科等を合わせての指導を行うことが効果的である。ことに、肢体不自由や病弱などの障害や疾患をあわせもち、障害の程度が重度化しつつある中で、ますます重要になっている。本研究では、そうした現状の中、教育課程の検討を行い、「生活単元学習」における領域・教科を合わせた指導の充実に取り組んだ実践の分析を行った。具体的には、①「重点とする内容からみた実態と段階の様相」を作成し、個の実態を正しく理解すること、②単元の要素表を作成し、付きたい力を具体化すること、③「個の実態と願う姿」をもとに指導の改善を図ること、④発達段階に応じた教材や興味や関心を示しやすい教材を工夫し、児童が良さを発揮できるようにすること、⑤環境設定の工夫により、児童同士の関わりを生み出すこと、⑥児童自身が自分のよさに気付く即時評価や授業における終末の評価をすることを重点に取り組んだ研究を報告し、実践の成果と課題を検討した。

キーワード：知的障害特別支援学校 教育課程 領域・教科を合わせた指導 生活単元学習
実態把握 授業づくり

I. 問題

知的障害とは、一般に、認知や言語などにかかわる知的能力や、他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇利用などについての適応能力が同年齢の児童生徒に求められるほどまでには至っておらず、特別な支援や配慮が必要な状態である。また、その状態は、環境的・社会的条件で変わ

り得る可能性があると言われている（梅谷・生川・堅田、2015など）。

知的障害者特別支援学校の小学部及び中学部の各教科等については、学校教育法施行規則第126条第2項及び第127条第2項において、その種類が規定されている。さらに、学習指導要領においては、知的障害の特徴及び学習上の特性等を踏まえ、児童生徒が自立し社会参加するために必要な知識や技能、

1) 岐阜市立岐阜特別支援学校 2) 教育学部 3) 名古屋第二赤十字病院

態度などを身に付けることを重視し、各教科等の目標と内容等が示されている。この中で、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科については、内容が概括的に示されている。すなわち、各学校が教育課程や指導計画を作成する際には、児童生徒の知的障害の状態等、学校や地域の実態等に即して、各教科の内容を具体化し、指導内容を設定する必要がある。

知的障害のある児童生徒の学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことなどが指摘されることが多い。また、実際的な生活経験が不足しがちであることから、実際の・具体的な内容の指導の方が抽象的な内容の指導よりも効果的である。特に、知的障害が極めて重度であったり、視覚障害や聴覚障害、肢体不自由、病弱など、他の障害や疾患を併せ有することも最近ではより多くなっており、一層のきめ細かな配慮が必要となる。

こうした実情のもと、知的障害者特別支援学校においては、児童生徒の知的障害の状態等に即した指導を進めるため、各教科、道徳、特別活動及び自立活動（以下、「各教科等」という）を合わせて指導を行う場合と、各教科等それぞれの時間を設けて指導を行う場合がある。各学校においては、児童生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、そうした指導が適切に行われるように指導計画を作成し、指導を行っている。

知的障害者、ことに重度・重複障害のある場合には、実際の体験を積み重ねて抽象度のある内容を指導していく必要があることから、各教科の指導のみならず、各教科等を合わせて指導を行うことが必要である。この各教科等を合わせて指導を行う場合とは、各教科、道徳、特別活動及び自立活動の一部又は全部を合わせ行うことである。知的障害者特別支援学校においては、この各教科等を合わせて指導を行うことが効果的であり、従前より、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などとしてこれが実践されてきており、それらは「領域・教科を合わせた指導」と呼ばれている。

このような各教科等を合わせて指導を行うことは、学校教育法施行規則第130条第2項に、「特別支

援学校で知的障害者を教育する場合において特に必要がある場合は、各教科、道徳、特別活動及び自立活動の全部又は一部について合わせて授業を行うことができる」とされている」という法的にも定められている。一方、国立特殊教育総合研究所は、2006年に「知的障害教育における領域・教科を合わせた指導と教科の専門性向上に関する研究」の一環として、特に領域・教科を合わせた指導の中でも「生活単元学習」について、指導の充実を図るためのガイドブックを作成した。この中で、生活単元学習の改善・充実を図るための評価を行う視点としては、次の7点が挙げられている。① 学校観・教育観、② 教育課程における生活単元学習の位置づけ、③ 年間指導計画の作成、④ 単元づくり、⑤ 授業づくり、⑥ 授業の実践と評価、⑦ 授業の改善。

この中でも重視すべき点は、授業づくりと日々の授業の改善ではないかと考える。子どもが主体的に活動する授業は、子どもにとって意欲のもてる課題（テーマ）が用意され、自ら学習活動に取り組めるための様々な条件が整えられることが必要となる。評価に当たっては、子どもの実際の活動状況をもとに、子どもの主体的活動を意図して準備された様々な手だての有効性を検討することになる。

そこで、本研究では、知的障害者特別支援学校における教育課程、および指導法の検討の一つとして、教科等を合わせた指導の実践を検討する。その際、児童生徒が主体的に活動し、意欲のもてる課題を設定することを重視した生活単元活動の一単元の実践を取り上げ、授業づくりと授業改善の示唆を得ることを目的にする。

II. 研究の目的

知的障害者特別支援学校における「領域・教科を合わせた指導」についての教育課程や授業改善を検討するために、一つの「生活単元学習」の授業について報告し、実践の検討を行う。

III. 研究の方法

1. 対象となる実践

20XX年に実施した、A特別支援学校（知的障害者特別支援学校）小学部5年生の生活単元学習「夏

を楽しもう－夏祭りをしよう－」の単元である。対象児童は11人（男8人、女3人）。指導者は4人、介助員1人である。

2. 分析の視点

単元づくりにあたっては、①子どもの理解、②テーマの設定と教材化を教師間で検討した。

また、実践検討にあたっては①単元づくり、②単元の目標、③単元指導計画、④指導の工夫、⑤個の実態と願う姿⑥本時の目標、⑦本時の展開、のそれぞれの観点から行った。

IV. 単元指導計画と指導案

1 単元づくり：ここでは前提となる、①子どもの理解、②テーマの設定と教材化について述べる。

(1) 子どもの理解

A 特別支援学校では、小学校4年時には、「柳ヶ瀬（注：地名）探検隊」という生活単元学習を通して、大人とやり取りをすることをねらいとする学習を実施している。例えば、鯛焼きを買う学習では、児童はお客さん役になっている。お店屋さんの役は、当初、①学年担当教師、②学校職員、③柳ヶ瀬商店街の鯛焼き屋さん、という順で変化させ、信頼関係のある教師とやり取りの学習を重ね、段階的に本当の鯛焼き屋とのやり取りを学習するように発展させた。

人とのかかわりについては、小学部低学年段階から、教職員や友達など人とのかかわりを豊かにし、共に活動することを教育課程の中で重視することで、自分の良さに気付く機会を増やすように取り組んでいる。また、何かの活動を達成できたことを喜び、自らの得意なことに気付けるように指導することで、自分の好きなものや、好きなことをもつことも目標としている。このなかで自分らしさを発揮したり、のびのびと活動したりすることができるように願って教育課程編成および授業づくりを行っている。

(2) テーマの設定と教材化

こうした小学部低学年および小学部4年生の学習をふまえ、小学部5年生では6、7月に「夏を楽しもう」というテーマでの学習を行っている。

本研究の対象としてとりあげた単元「夏を楽しもう」では、夏独特のいろいろな楽しみ、例えば「水遊び」や「冷たいデザート作り」などを体験する単元である。その内容の一つとして、より良く仲間とかかわる力をさらに育てるために、「夏祭りをしよう」をその中に取り入れた。

これは、夏祭りの縁日をイメージしたお店を作り、児童がお店屋さんとお客さんの役割を交代しながら活動することで、友だちに自分の思いを伝えることができる活動を行うことができるよう、考案したものである。それは、それまでに体験した柳ヶ瀬探検などの役割交替あそびが基礎になっている。

この中で、発語のある児童は「いらっしゃいませ。」「何がいいですか。」「ありがとうございます。」「〇〇をお願いします。」など、相手が気持ちよく答えられるような丁寧な言葉で話すことを期待し、発語のない児童は、「遊び券」を渡すことでその店で遊びたいことや写真を身振りなどで選んだりするなど、自分の思いを伝えたいという意欲を高めることを意図した関わりを行った。

また、お客さんとお店屋さんのやり取りは、一方通行では成り立たないため、相手が何を望んでいるのか、どう答えてくれたのかを自分なりに考えなくてはならない。夏祭りという遊びを通して、相手の思いを考えることが、日常生活においても、より良く仲間とかかわる力につながると考え、本単元を教育課程の中で位置づけた。

2 授業作り

(1) 単元名 夏を楽しもう－夏祭りをしよう－
(生活単元学習)

(2) 単元の目標

お店屋さんの役を行うことで、お客さん役の仲間に合わせて接したり、お客さんの役をすることで、自分の思いをお店屋さん役の仲間に伝えるなどの役割に応じたコミュニケーションをすることができる。

(3) 単元指導計画

単元指導計画は表1～2のとおりである。また、表3に、この単元指導計画における児童および教師の役割分担を示した。

表1 「水遊び・デザート作りをしよう」の単元指導計画(11時間)

次	時	ねらい	主な活動
1 (1)	1	「夏を楽しもう」で、どんな活動をするのかを知り、活動を楽しみにすることができる。	・水遊び、冷たい食べ物、緑日や模擬店の話を聞いたり、映像を見たりしてイメージや見通しをもつ。
2 (2)	2 3	金魚すくいや水鉄砲で水遊びを楽しむことができる。	・中庭にプールを用意し水を使って遊ぶ。 (中庭)
3 (8)	4	写真や実物を見て冷たい食べ物を作って食べる見通しをもつ。	・ゼリー作りの材料や作り方を知り、冷たい食べ物作りの計画をする。
	5 6	買う物を選んだり代金を払ったりして商品を受け取ることができる。	・ゼリー作りに必要な材料を模型を使って教室で買い物をする。
	7 8	オークワへ行ってゼリー作りの材料を買うことができる。	・オークワで必要な材料を探して買う。 (校外学習)
	9 10 11	ゼリーを作って食べることができる。 ～水遊び・デザート作りをしよう～の振り返りができる。	・ゼリーを型に流し、冷やして食べる。・写真を見て活動を振り返る。

表2 「夏祭りをしよう」の単元指導計画(10時間)

次	時	ねらい	主な活動
1	1	お店で遊ぼう① 射的屋さん、ボーリングなどで遊ぶことができる。	・お店屋さん役の教師に対して、お客さんになって遊ぶ。
	2	お店で遊ぼう② 金魚すくい・ボーリング・カメラ屋さんなどで遊び券を使って遊ぶことができる。	・お店屋さん役の教師に対して、お客さんになって遊び券を使って遊ぶ。
2	3	お店屋さんの分担を決めて夏祭りの計画をすることができる。	・どんなお店をするのか決める。 ・お店の担当を決める。
3	4	お店屋さんで使う道具を作り、遊ぶことができる。	・自分の担当のお店を準備する。
	5		・お店屋さんの役割を決める。
4	6	夏祭りをしよう① 射的・クリスタルショップ・キャラ釣り屋さんで遊ぶことができる。	・お店屋さんとお客さんの役割をして遊ぶ。 (プレイルーム)
	7	夏祭りをしよう② 輪投げ屋さん・カメラ屋さん・キャラ釣り屋さんで遊ぶことができる。	・お店屋さんとお客さんの役割をして、遊び券を使って遊ぶ。 (プレイルーム)
	8	夏祭りをしよう③ カメラ屋さん・キャラ釣り屋さん・クリスタルショップで遊ぶことができる。	・お店屋さんとお客さんの役割をして、遊び券を使って関わって遊ぶ。 (プレイルーム)
	9 本時	夏祭りをしよう④ カメラ屋さん・キャラ釣り屋さん・クリスタルショップで遊ぶことができる。	・お店屋さんとお客さんの役割をして、遊び券を使って自由に遊ぶ。 (プレイルーム)
5	10	「夏祭りをしよう」の活動を振り返ることができる。	・写真を見て活動を振り返る。

表3 第9時(本時)の児童および教師の役割分担

お店	第9時 前半		第9時 後半		教師
	お店屋さん	お客さん	お店屋さん	お客さん	
キャラ釣り屋さん	G H	D E F I	F J	A B	T4
クリスタルショップ	A C	J K	D E	C G H	T2
カメラ屋さん	B	T3 介1	I K	T3 T5	T1

(4) 指導の工夫：指導の工夫をした2つの事項について述べる。

①個の実態を正しく捉え、要素表を生かした願う姿を具体化するための工夫

小学部5年生の児童の実態は多様で、個々の興味・関心の内容やコミュニケーションの力には大き

な違いが見られる。そこで、二つの資料を作成している。資料1は、個々の子どもたちの実態を把握するために行動観察を手がかりとして教師が記入するようにしているものである。また、資料2は、本単元の活動を要素に区分し、そこでの達成目標を個々に明確にしたものである。

小学部 5年 7月 「夏祭りをしよう」本校小学部5年生における重点とする内容からみた実態と段階の様相（資料1）

自立活動 6 コミュニケーションの内容からみた児童の実態

○できる ●十分できない

	例1	例2												
(1) 基礎的能力に関すること														
強い欲求がある時に、身ぶりやクレーンで伝えようとする。	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
身ぶりやクレーンなどで、意思を伝えようとする。	●	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
(2) 言語の受容と表出に関すること														
話し言葉、文字、記号などを用いて、意思を伝える。	●	○												
言語の表出はないが、理解言語、内言語はある。	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
明瞭な発音ができる。	-	-												
話している人を見て聞くことができる。	●	○												
(3) 言語の形成と活用に関すること														
身近な物事や自分の行動に対応した言葉が遣える。	-	○												
日常生活の中で、言葉や身振りによる指示が理解ができる。	●	○												
(4) 手段の選択と活用に関すること														
話し言葉などをコミュニケーションのために遣える。	-	○												
(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること														
分からないことを質問できる。	-	○												
相手に合わせた言葉遣いができる。	-	●												
相手や場に応じて、自分からコミュニケーションできる。	-													

※項目が達成できているが不要のない場合は、/ まだ項目の段階まで達していない場合は、- を用いた。

②児童のよさに気づき、つながるための環境設定と評価の工夫

本授業では、仲間同士のやりとりが必要となる夏祭りのお店屋さんという場面設定を考えている。おさん客役として、自分の好きな物を手に入れたり好きなことをしたりすることで、楽しく意欲的に活動に参加することができるのではないかといいねらいを持っている。また、授業の終末では、自分がお店で得たものを仲間に見せることで「自分がかんばったこと」を表現することができるのではないかと考え、単位時間内にお店屋さんとお客さんの両方の役割を行うこととした。

全員が手持ち無沙汰になることなくお店屋さんに

なれるよう児童の人数配分を考えて、店の数は3つとした。なお、店の内容は、個々の児童の実態を考慮して、普段、教科学習などの活動にあまり積極的になれない児童も楽しめるもの考えた。例えば、砂遊びや水遊びなどの感覚遊びが大好きな児童が興味をもてるよう、触り心地のよい小物や、キラキラする物などを景品とした「クリスタルショップ」、また、日常的な意思表示は少ないが、「好きなアニメ番組の歌を歌って欲しい」、「本を見たい」という欲求は、積極的に伝えようとする児童をイメージし、その児童の好きなキャラクターを景品に取り入れた「キャラ釣り屋さん」や「カメラ屋さん」などである。まずは興味をもって自分が欲しいと思ったことを、

(資料2) ～夏祭りをしよう～

教科等の要素		本単元で関連する活動内容	単元指導計画の中で関連する位置(時)										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9(本時)	10	
教科	健康・安全	・約束を守って安全に道具を使って遊ぶ。	○	○				○	○	○	○	○	
		・周りの状況を見て移動する。						○	○	○	○		
	交際	・お客さん役はお店屋さん役の友達にわかるように思いを伝える。						○	○	○	○		
		・お店屋さん役はお客さん役の友達が楽しめるように接客をする。						○	○	○	○		
		・困っている友達の手伝いをする。						○	○	○	○		
		・「ありがとう」の気持ちを身振りや言葉で伝える。						○	○	○	○		
	生活	遊び	・お店の人に遊び券を渡す。		○				○	○	○	○	
			・遊び券を渡すと遊べるのが分かる。		○				○	○	○	○	
		・遊びたいお店を選ぶ。	○	○				○	○	○	○		
		・「お願いします」「これが欲しいです。」など、遊びに必要な簡単な言葉を遣ったり拍手や指差して伝えたりする。	○	○				○	○	○	○		
		・お店屋さんの指示に従って遊ぶ。	○	○				○	○	○	○		
	役割	・自分の役が分かる。			○	○	○	○	○	○	○		
		・時間いっぱい自分の役になりきる。						○	○	○	○		
		・役割に合わせて衣装を替える。						○	○	○	○		
	日課・予定	・学習時間を守って行動する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	国語	聞く・話す	・お店屋さん役、お客さん役になって、相手に話しかけたり応えたりする。						○	○	○	○	
		読む	・店の看板や約束・めあてカードに書かれた文字を読む。				○	○	○	○	○		
		書く	・店の看板の文字や約束を書いて掲示する。				○	○					
			・いろいろな筆記用具を使って書く。				○	○					
	算数	数量の基礎	・遊べる回数や獲得したおもちゃなどの数が分かる。						○	○	○	○	
実務		・時計に関心を持ち、活動の始まる時刻が分かる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		・カレンダーを見て、活動の見通しをもつ。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
音楽	音楽遊び	・活動の始まりや終わりが音楽によって分かる。	○	○				○	○	○	○		
図画工作	表現	・看板作りの飾りつけをする。				○	○						
	材料・用具	・マジックやクレヨン、絵の具、モールなどの用具を使って看板を作る。				○	○						
	鑑賞	・友達どうしてお互いの看板を見合う。				○	○						
自立	心理的な安定	・落ち着いて活動に参加する。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	人間関係の形成	・みんなでそろって話を聞いたり、活動したりする。	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		・お店屋さん役、お客さん役の思いや意図を理解する。						○	○	○	○		
	環境の把握	・周囲の状況を見て、遊びを選んだり呼び込みをしたりする。						○	○	○	○		
	コミュニケーション	・「おねがいします」「これ、ください。」など要求を身振りや言葉で伝える。	○	○				○	○	○	○		
・相手の身ぶりや言葉などの思いや要求を受けて、身振りや言葉で応える。							○	○	○	○			

相手に向かって自ら言動を示すことで、好きな物が手に入る、という行動と結果のつながりを感じてほしいと考えている。発語があり、人とかかわることに抵抗のない児童に対しては、いろいろな話しかけが必要となる「カメラ屋さん」で活躍する姿を期待している。

活動の方法として、発語のない児童もいるため、店で遊びたいときは「遊び券」というような視覚的にもわかりやすいものを店の人に渡すこととした。お店屋さんの仕事は、「遊び券」を受け取る係、釣

り竿を渡す係や好きなキャラクターを選んでもらう係、すくうための網を渡す係に分け、店を担当する児童の役割を明確にした。一つの仕事を確実に行う児童、複数の仕事を一人でこなす児童など、実態に応じて仕事の仕方を変えたり、お店屋さんとなる児童のペアリングは、二人で協力してお客さんへの対応を進められるような組み合わせになるように配慮して決めたりした。

評価は、児童が「できた」ことを実感しやすいよう即時評価を行うこととした。担当の教師が個々の

目標を把握しておくことで、児童につけたい力の形成など、目指す姿が見られた時、その場ですぐに言葉やハイタッチなどで評価をすることにした。授業の終末には、お客さんとして遊んで得た景品を仲間に見せながら「自分がかんばったこと」を伝える場を設け、全体の場での一人一人の評価とした。特にある児童の頑張りを仲間知ってほしい際には、抽

出見に焦点を絞って実際に見られた姿を紹介し、その姿を伝えていくことをねらいにした。

(5) 個の実態と願う姿

一人一人について、次のような個の実態と願う姿を作成した。表4は、知的障害のあるB児について述べたものである。

表4 B児の実態と単元のなかで願う姿、本児の目標、手立て

個の実態と単元で願う姿	本時の目標	手立て ○良さに気付くための手立て ●つながるための手立て
人とのかわいが好きで、自分から進んでコミュニケーションをとることができる。 本単元では、カメラで撮影する役割を行い、画枠にお客さんが入るように位置を確かめたり、ポーズをとってもらうように働きかけたりすることが積極的にできるようにしたい。	カメラ屋さんでお客さんに「もうちょっとこっちに立って。」「ピースをして。」「にっこりして。」など写真の写り方を指示することができる。	○お客さんがうまく写真に写るような指示の仕方が出来た姿を褒める。 ●法被を着て活動することでお店屋さんになりきって写真の写り方がうまくできた接客の仕方を称賛する。

(6) B児の本時の目標

B児の本時の目標としては、一つは、夏祭りでお店屋さんの役割を分担し、お客さんに楽しんでもらうことができること。二つには、夏祭りでお客さんとしてB児と仲間どうしが互いにかかわって遊

ぶことができることの、2点である。楽しみ、関わりを重点にした。

(7) 本時の展開

表5は授業の展開のなかで、B児の活動、活動における支援、留意事項を記したものである。

表5 授業の指導案（B児の活動、支援、留意事項）

時	児童の活動	活動における支援（ ○全体 ・個人に関する支援 ）	留意点等
0	1 平均台に座って、あいさつをする。	○みんなが座ったらあいさつをして活動を始める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">みんなで なつまつりを たのしもう。</div>	・パーテーションを用意する。
2	2 本時の活動の見通しをもつ。 ・どんなお店があるかが分かる。 ・自分の役割の順番が分かる。		・お店屋役の法被を用意する。 ・3つのお店でお店屋さんとお客さん分かれて活動することを伝える。
5	3 キャラ釣り屋さん、カメラ屋さん、クリスタルショップに分かれて活動する。 ・お店屋さんは、お客さんから遊び券を受け取って遊んでもらう。	(キャラ釣り屋さん) 前半 G H 後半 F J ○容易に釣り上げられる釣り竿と興味のある絵がついたキャラクターを用意する。 ・「どんな言葉を遣えばよいかや言葉を言うタイミングが分かるように、言う言葉をカードで示したり、ペアの子との役割分担を明確にしたりする。J	・お客さんは遊び券を渡して遊ぶことを知らせる。 ・音楽が聞こえたら交代することを知らせる。 ・お店での遊びが楽しみになるような言葉がけをする。

	<p>(キャラ釣り屋さん) 遊び券をもらう→釣り竿を渡す→釣り上げた物を渡す→釣り竿を受け取る。</p> <p>(クリスタルショップ) 遊び券をもらう→スコップを渡す→すくった物を袋に入れる→渡す→スコップを受け取る。</p> <p>(カメラ屋さん) 遊び券をもらう→絵を決めてもらう→写真を撮る→写真を見せる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お客さんは、お店の人に、遊びたい意思を自分の方法で伝える。 ・言葉で伝える→遊び券を渡す→遊ぶ。 ・ジェスチャーで伝える→遊び券を渡す→遊ぶ。 ・別のお店屋さんへ移動する。 ・同じ遊びを繰り返し楽しむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>交代の合図(音楽)で、お店屋さんとお客さんを交代する。</p> </div>	<p>(クリスタルショップ) 前半 A C 後半 D E</p> <p>○容易にすくえるスコップと興味を引き付けつけるキラキラした物や食べることもできるゼリーなどを用意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お客さんとのやりとりが楽しめるように、最初は台詞カードを使ってのやりとりから、徐々に台詞カードを使わずにやりとりができるようにしていく。お客さんの言葉や身振りを見てから話すように教師が「傍」で「お客さんは何て言ったの?」と聞くなどしてお客さんの思いに気付けるようにする。(D) <p>(カメラ屋さん) 前半 B 後半 I K</p> <p>○一緒に写る被写体は、興味のある拡大画像の中から選べるようにメニューを用意する。</p> <p>(お客さん)</p> <p>○3つのお店で遊べる4枚つづりの共通遊び券を一人一冊用意し、それを持ってお店をまわって遊ぶことができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな言葉で話したらよいか分かるよう、お店屋さんへ話しかける言葉のパターンをカードにし、その中から自分の思いに合う言葉を選べるようにする。(G) ・お店に興味をもち、「遊びたい」という気持ちがあるように、好きなキャラクターがもらえるお店を作り、遊び方の手順を示しておく。その際、自分から思いを伝える場を意識できるようにする。「遊びたいです。」「お願いします。」「〇〇が欲しいです。」などの言葉カードを用意し、「こんなふうに言うとお店さんに伝わるよ。」と言葉かけをして支援する。大きい声で話すと伝わりやすいことを伝え、教師が「大きな声」を示すジェスチャーをして見せ、大きい声で話すことを意識できるようにする。(F) <p>○自分の景品をビニール袋に入れて見せ合うことができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・もらったものは家に持ち帰ってよいことを知らせる。 ・お客がいないときには、お客を呼び込んだり、空いている店を知らせたりする。 ・受け取った遊び券はケースにしまう。 ・もらったものは、袋に入れる。 ・遊び券の使い方は、同じ店で複数回遊んだり、全店全てで遊んだりして、自分の判断で自由に遊ぶ。 <p>・全体に広めたい児童の姿を紹介し、価値付けを行う。</p>
40	4	4	4

V. 実践の結果と考察

ここでは、前章で述べた単元の指導計画と指導案のうち、「授業づくり④指導の工夫」で述べた点が有効であったかを、実践の結果をふまえて考察する。

(1) 個の実態をよりの確に捉え、要素表を活かした児童への願う姿を具体化するための工夫

①「重点とする内容からみた実態と段階の様相」を作成し、個の実態を理解するための一助とすることができた。

これに先立つ学年の指導のなかで、児童一人一人の人とかかわる力をつけたいという願いをも

ち、役割交替を入れた活動を順を追って進めてきたが、このように人とかかわりの力を重点にし、「本校5年生における重点とする内容からみた実態と段階の様相」(資料1)を作成した。これは、「基礎的能力に関すること」から「状況に応じたコミュニケーションに関すること」まで、12の観点から一人一人の一人できることを把握するために、A 特別支援学校独自で考案されたものである。この資料を一人ひとりの児童の実態に基づいて教師が作成することにより、それぞれの児童に経験させたい学習活動を考えることができた。

- ②単元の要素表を作成し、付けたい力を具体化することができた

「領域・教科を合わせた指導」においては、指導すべき内容が曖昧になる傾向があるが、資料2「夏祭りをしよう 要素表」を作成したことで、教科等の要素を踏まえつつ、この授業において、どの活動がどの教科に位置づくかについて、具体的に付けたい力を教科の要素に照合させることができ、学習を進める上で有効であった。

- ③「個の実態と願う姿」をもとに指導の改善をすることができた

一人一人について、「個の実態と願う姿」を作成した。授業後の担当教師による学年打ち合わせにおいて、児童の学習の様子をもとに指導の在り方が適切であったかを適宜評価し、次の授業に向けて指導内容や指導方法を改善し、効果的な指導を行うことができた。

(2) 児童の良さに気付き、つながるための環境設定と評価の工夫

- ①児童が興味や関心をもって活動することができた

児童理解をもとにして、児童の発達段階に応じた教材、児童が興味や関心を示しやすい教材を準備することができた。図1、図2は、前もって児

童の実態把握をふまえ、児童が自ら関心を示しやすいいくつかの教材を用意し、自由に選び取ることで参加を促すようにしている場面である。これによると、教師が「～させる」ことを受身的に行動するのでなく、児童が前向きに活動に取り組む行動を見出すことができた。

その際、感覚遊びが大好きな児童が好きだという実態から、触り心地のよい小物、ぷよぷよによる物、キラキラする物、光る物を準備した。知的障害や自閉症スペクトラムの児童のなかでは、こうした刺激に過敏であり受け付けられない児童も在籍しているが、本授業の対象児は、こうした感覚刺激や光刺激があり、感覚遊びを楽しむことのできる児童であることが事前の学習や実態調査で教師が把握していた。また、「夏を楽しもう」の事前学習の中で、水遊びが好きな児童が多いという実態も把握していた。水を使いながら、これらの小物を自由にすくい取るという活動を位置付けることにより、水遊びや光刺激、触り心地が好きな児童が、活動に前向きに取り組むことができた。さらに、これらの物が並んだ「クリスタルショップ」は、児童にとって魅力的な店になっている。



図1 自分が好きな物を自由にすくい取る



図2 ぷよぷよ、キラキラ、光る等、色々あるよ

- ②日常的な意思表示が少ない児童も参加することができた

日常的に意思表示が少ない児童は、活動自体への参加をすることで指導の手立てが必要になる。そのため、参加への動機づけを丁寧に行う必要がある。本単元指導では、そうした児童に、児童が好きなテレビアニメやキャラクターを用い、「キャラ釣り屋さん」「カメラ屋さん」などのお店

に位置付けることにした。「キャラ釣り屋さん」では、図3のように、健康飲料のプラスチック製小型空きパック等に児童の好きなキャラクター写真やイラストを貼り付けたものを、釣り上げ用キャラクターとした。

こうして動機づけを行うことにより、日常的に意思表示の少ない児童も自分の好きなキャラクターに的を絞って、何としても自分の好きなキャ

ラクターを釣り上げようとする姿が散見された。

また、「カメラ屋さん」では、図8のように、キャラクターを等身大の大きさで準備したことで、臨場感が増した。自分の好きなキャラクターと一緒に

に写真を撮ることができるので、嬉しそうな表情を見せたり、決めポーズをとったりする姿が見られた。



図3 みんなが好きなキャラクターを集めました



図4 よし、このキャラクターを釣るぞ！

③環境設定の工夫により、児童同士の関わりを生み出すことができた

授業においては、個々の児童への指導だけでなく、児童同士の関わりを生み出すことが重要であり、仲間を意識し、関わりを生み出すために、下記の4つの工夫を行った。以下に列記する。

【工夫1】お客さんとして、遊びたいという気持ちを「遊び券」で伝える

発語のない児童も、自分が遊びたいという気持ちを相手に伝えられるようにするため、「遊び券」を作った。どのお店も、児童にとって楽しい内容であったため、お客さん役番になると、自分のお目当ての店へ走って行き、お店屋さんに「遊びたいです。」と伝えたり、遊び券を渡して手を合わせてお願いのポーズをしたり、指さしをして遊びたい内容を伝えたりするなど、それぞれのコミュニケーション手段を使い、主体的に自分の思いを伝えようとする姿が見られ、それが児童相互の関わりを生み出すことになっていた。

【工夫2】お客さんとして、主体的に遊ぶ

お店は3種類であるが、遊び券を4枚発行した。3つのお店を全部回っても、1枚遊び券が残ることになる。この1枚を使って、児童自身が一番行きたいお店を選ぶ機会になる。自己選択、自己決

定することができるような配慮として、このような場面を設けた。

【工夫3】お店屋さんとして、自分の役割を果たそうとする

お店屋さん役の子は、自分の店にお客さんが来てくれたことを喜び、笑顔で接客していた。お客さんから遊び券を受け取る、道具をお客さんに渡すなど、お客さんに対してお店屋さんとして自分の役割を果たそうとする姿が見られた。このことによって、児童相互が役割交替を行うことで、自然に関わりが生まれた姿があった。

【工夫4】ヒントカードを参考にして相手と関わろうとする

コミュニケーションの支援として、相手にどのように話せばよいか分かりにくい児童のために、お店屋さんの時の言い方、お客さんの時の言い方を書いたヒントカードを用意した。児童に応じて、参考にできるように手元に置いたり、目に見えるところに掲示したりした。児童は、このヒントカードを参考にしながら、相手と関わることができた。慣れてくると、ヒントカードを見なくても自分で言えるようになった児童の姿が散見された。

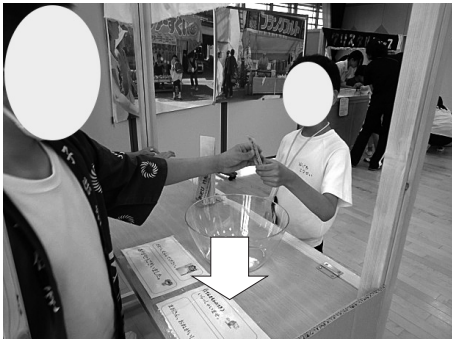


図5 手元のヒントカードを参考にできます。

個別のヒントカード（文例）
 ・（けんをもらったとき）
 いらっしやいませ。
 ○○さん、おねがいします。

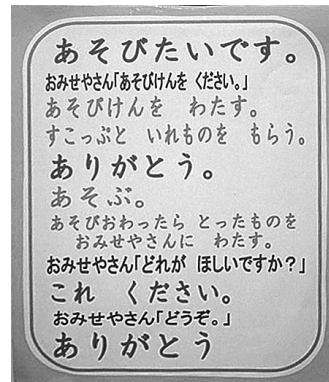


図6 全体の流れを示すヒントカード

④児童自身が自分のよさに気付く評価をすることができた

授業では、児童自身が「できた」と実感しやすいように教師が即時評価を行っている。また、ねらいを授業の終末において、全体の評価で位置付けている。またお店を担当する職員が担当の児童の言動を見て、教師がその都度即時適宜を行っている。児童ががんばったこと、やってみたことなどを言葉で認める、笑顔で認める、ハイタッチで認めるなどをし、児童に伝わる評価を行うよう配慮した。

終末における評価は、児童がお客さん役の時に得た景品をみんなに紹介することで、児童の頑張りを、教師や他の児童と共有しあう形をとった。また、児童がそれを視覚的に理解できるように、本時に撮影した写真を、終末の評価の時に大型テレビに映し出している。「楽しかったね」「お客さんとうまく接することができたね」「お客さんに喜んでもらえたね」とお互いが言い合うことにより、児童たちはできた喜びをより実感することができた。

（3）事例に即しての検討

こうした授業の成果をふまえ、具体的に指導にとって児童がどのような変容をみせたかを述べる。

表6 本単元指導におけるB児の様子

○児童の様子

カメラ屋さんになった児童は、お客さんとして来店した児童の好きなことを言って、相手を笑わせてからシャッターを切ったり、相手が好きな歌を歌ってあげて、顔がカメラの方を向いたときにシャッターを切ったりするなど、相手に合わせた対応ができていたのが、素晴らしかった。カメラ屋さんという店の設定ならではのやり取りが生まれたと言える。

表6は、本単元指導におけるB児の活動の様子である。これによると、B児は小学部4年生の終わりには、教師や友達の話落ち着いた聞いていたり、その場の状況を考えて行動したりすることができるように力がついてきた児童である。5年生になり、保護者からは、相手が喜んでくか嫌がっているかが分かるようになってほしいという願いが出された。本単元では、そうした児童の実態と保護者からの願いをふまえ、本単元指導における目標を設定した。

本単元の授業では、図6のように、B児が法被を着て、カメラ屋さんとして張り切っていた。「こっちを向いて」など、お客さんがうまく写るように指示を出しながら、相手が好きな歌を歌って楽しい撮影場面になるなど、相手の気持ちを踏まえた対応ができるようになっていった。こうした姿から、保護者の願う、相手の気持ちがわかる力が徐々に育ってきたと言える。お客さんが帰ると、お客さんのため

に用意した等身大のキャラクターをゴロゴロと押し
て片付けることもできていた。撮影するという自分
にとって楽しい事だけでなく、図9のように、片付
けなどの仕事もカメラ屋さんの仕事だと考え、自分
の役割を果たそうとしていた。

このような姿が多く見られたのは、どうしてだろ
うか。それは、カメラ屋さんが本人にとって、自信
をもっていることから安心して役割を担え、達成感
からやりがいのある活動であったからと推察され
る。お客さんを迎え、カメラ屋さんとしていい写真

を撮りたいと考えたから、相手が好きな歌を歌って
楽しい環境を作り、写真を撮れるように工夫したこ
とからも明らかである。楽しくてやりがいのあるカ
メラ屋さんだから、結果として、相手とのやり取り
が豊かなものになっていったのではないかと思われ
た。このような児童の主体的な活動を生む、生活単
元学習を位置づけることにより、結果として領域や
教科の内容が学習され、児童の力が形成されていく
のではないかと考えられる。

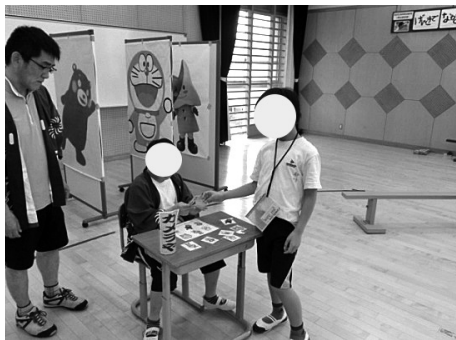


図7 受付で、お客さんの遊び券を受け付けます



図8 カメラ屋さんとして撮影します。



図9 撮影後、キャラクターを片付けます。

VI 総合的考察—本実践の成果と課題

本実践をもとに、実践分析を行い、第二筆者と第
三筆者が成果と課題について整理した点について述
べる。

一つは、児童の実態を教師間で共有し、より客観
的で指導につながる具体的な実態把握に努めている
という点についてである。ここでは、コミュニケー
ションの能力や手段を取り上げ、その実態把握表を
一人ひとりの児童の行動観察を手がかりに教師が記
入することで、実態把握をより客観化する手立てを
行っている点が評価される。実態把握の方法は、知

能検査や行動観察、関係者からの聴取などによって
客観的に行うことが求められているが、こうした実
態把握を教師間で共有していくことが必要であり、
このような学校で考案された資料を手がかりに実態
把握に努めている点が評価できる。

二点目は、そうしたコミュニケーションの能力を
それまでの授業と連結させて評価し、それまでの実
践の継続、展開として指導を考案されているという
点である。特別支援教育において、指導の継続性が
強調される場所であるが、ややもすると学年や担
当教師が変わる中で、課題が継続せずに、児童の実
態や課題が新学期に最初からスタートするために、

教師は手探りで指導を開始しなければならない問題も指摘される(別府、2013)。特別支援学校はその点、継続した指導が行われる条件にはあるが、それを意識して計画していくことも必要である。その点、この実践では、コミュニケーション能力を柱に、低学年、小学部4年生の実践を連結させている点に有効性があるのではないかと考えられる。

三点目は、コミュニケーション能力を高める基盤として、活動への参加の動機づけや児童が自ら関心、興味をもつ教材、教具作りに配慮しているという点である。児童が関心を持てるキャラクター使い、それまでの活動の中で水遊びに興味をもっているという実態を踏まえた、キャラ釣り屋さん、クリスタルショップが設定されている。これらは児童の動機づけを図り、ことに自発語や人への関わる事が弱い児童に対して効果的であったことが述べられているように、発達段階を越えて、どの児童にも参加を促し、授業の中で「お客さんを作らない」ことが意図されている点で重要である。そして、B児の報告を通し、実際の児童の変容を生み出している。さらに、「ヒントカード」を用い、具体的な場面でどうコミュニケーションを行うことが必要かの手立てを提示している点も、児童が力を発揮していく上で有効だと推察された。

四点目は、個々の児童の対教師の関わりだけでなく、多様な対人関係の広がりや構築を目指しているという点である。4年生までの学習においても、対教師だけでなく、学校内、および地域の人との関わりを図るよう、意図されていた。本単元の授業では、仲間との関係を構築するための配慮が行われている点が重要である。役割交替を通し、あるいは役割を果たすことを意図し、評価することで、保護者が願う、「人の気持ちをわかるようになってほしい」という課題を考慮した取り組みがなされ、児童のそうした姿が散見されるようになってきている点からも目標に照らして効果的な指導であったといえよう。

五点目は、個々の児童の活動に対しての達成感を重視し、教師や仲間から認められる場面を意図的に設定しているという点である。活動に対しての即時評価だけでなく、授業終了後にスクリーンに映して仲間と共に振り返り、それぞれの活躍場面を評価しあうことなどが設定されていた。また、実際に役割分担して“夏祭り”を行う活動を4回繰り返す行

ことで、とるべき行動が明確になり、安心した状況の中で成功体験を積み重ねることができたと考えられる。これはそれまでおそらく成功体験が少なく、失敗経験もしてきた児童たちが、他者から認めてもらえる経験、そして、自分自身でもやりがいや達成感を味わい、自己評価が高まることは、「自分はかけがえない存在」と捉えなおしていく上で重要である。「自ら選びたい」、という気持ちを尊重し、場面設定工夫している工夫も紹介されていたが、児童たちの自尊心を育てていくことと関連があるように受け取れる。

このような児童の変容を生みだし、保護者の願いにも応える活動を授業の中で、丁寧に、綿密に計画し、成果を上げている点が評価される。今後、こうした取り組みを特別支援学校の教育課程や指導法の中でどのように位置づけていくかについて、実践を蓄積させて明らかにしていくことが求められよう。

最後に、このような授業を、領域・教科等を統合した指導の中で実施している点について、述べる。特別支援教育の中で、生活単元学習など、教科の枠を超えた指導が実施されてきた。また、児童生徒の実態にあわせ、「準ずる教育」ということが行われてきた。しかし、教育は人類の文化遺産を次世代に継承していくものであり、それを児童生徒の年齢や発達の段階に応じ、教育的指導を通じて行っていく上で、教科学習の果たす役割があることは言うまでもないことである。特別支援教育の教育課程においても、このような教科学習との関連性を考えていくことが重要とされてきた。しかし、ことに、障害の重度化や重複化が進んでいる実情において、指導のあり方を考えていくことが求められている。

その中で、A特別支援学校では、単元の活動を要素表という資料によって区分し、そこでの達成目標を個々に明確にしている。これは、児童生徒の実態にあわせた意図する活動が、教科学習の中でどう位置づけていくかを検討していく上で、ひとつの素材になるのではないかと考える。第一筆者の熊田正俊も、「教師の主観的な見方だけでなく、要素表に沿って分析し、それを授業者で共有できたことで、児童一人一人が主体的に活動できる場の設定をすることができた」と述べているように、今後この要素表をもとに、さらに検討を加え、特別支援教育の対象児童生徒にとって、より有効な教育課程や指導法の充

実に向けて研究を進展させていくことが課題である。

【付記】

本報告は、鎌手晋、谷川明美、井上京子、野田幸世、早川和代が行った授業を第一筆者の熊田正俊が実践研究としてまとめたものである。また、別府悦子と野村香代が実践検討を行い、宮本正一が全体を通して校閲した。

本実践を公開するにあたっては、十分な倫理的配慮のもと、保護者や他の教職員に対し、説明を行い、同意を得ている。また個人が特定されないように、報告事例についての生育歴や障害の状況などの詳細は割愛した。公表を許可して下さった児童の保護者や学校の教職員に深く感謝いたします。

引用文献

別府悦子（2013）特別支援教育における教師の指導
困難とコンサルテーション， 風間書房.

文部科学省（2009）『特別支援学校 学習指導要領
解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』, p242,
243, 244, 245.

国立特殊教育総合研究所（2006）『生活単元学習を
実践する教師のためのガイドブック』 研究代表
者：木村宣孝, p.111, 113.

菊地一文 他・国立特別支援教育総合研究所教育支
援部（2010）国立特別支援教育総合研究所専門研
究B 【知的障害教育におけるキャリア教育の在り
方に関する研究－「キャリア発達段階・内容表（試
案）」に基づく実践モデルの構築を目指して－, 21,
22年, p.49.

文部科学省（2009）『特別支援学校 学習指導要領
解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』, p242,
243, 244, 245.

梅谷忠勇・生川善雄・堅田明義（2015）特別支援児
の心理学, 北大路書房.

（2015年12月18日 受稿）